

今日の出来事

カーテンは、閉じられた。日は落ちたが、それにも増して、この部屋の明かりは灯り、私達を照らし出した。

さくらが、咲き始め、冬はもう終わろうとしている。同じ桜の下を歩み、花弁を踏みしめた私達の足は、止まった。

今日、私は、彼女と、別れた。解り合いたかった。けれど、別れを前にする事で、私は、共用に、強要を、成してしまった。

私達は出会い、視線を近づけ、共に歩み始めて、行く歳が過ぎた。その間、私は、ずっと、彼女が歩んで来た道を、彼女が見てきた物を、例えば、その地を、探し求めて来た。けれど、私がそこで見たものは、何も表現してはいない彼女だった。おそらく、彼女は、疲れていた、私すら、疲れ始めていた。

その疲れが、共に食事をする事で、通じ合っていると、錯覚させたというのだろうか？ 彼女は、私の後ろから、何を見ていたのか？ 本当に、私達は、共に見たモノが、あっただろうか？ そして、私は、共感を得られない虚無感を、食べ続けた。

私は、嘘を言った事はなかったし、夢を見ていた訳でもない。この悲しい現実が、夢であって欲しいと、事実よりもっと、本当の現実である事を、願った。リズムも、味も、無い、身も、心も、動かされない、言葉の描写した世界に、身を置いた彼女こそが、事実、夢の中にいたのではないだろうか？

彼女は、あの雨を、本当に見たのだろうか？ 私を、本当に愛しただろうか？ 彼女が、本当に食べたかった物は何なのか。彼女と別れた今、その実を聞く事は出来ない。

けれど、解っている、いや、解っているとは言えない、それでも、私は、このまま、彼女にも、自分自身にも、食事を強要する事は出来なかった。彼女は、私の言葉を嘘だと言った。彼女にとって、私は、着ぐるみを着た人間でしかなかった、そのくせ、自分を覆う厚い肉にすら、気付かない人間に。鬼の仮面を被っても、人間は、人間だ。

私は、彼女からではなく、私自身の無力感から、逃れたかった。本当の事を言おう、私は、彼女に、私の悲しみを、見て、欲しかった、それでも愛し、受け入れてくれたならば、私は、彼女自身にすら成り得たはずだった。雨が、降ってきた、雨が、川の流れを、水嵩を、上げていく。